兒童心理學文獻抄 十四

牛島義友

言語の發達

語彙の增加

乳兒期から幼兒、兒童期に亙つて示す目に見えた身體の發育に何人も驚異の眼を向けるが、それにもまさる目に見えない知識の增加に對しては人は割合に無關心であつて、子供を何も知らない幼稚な存在として過少視してゐる。

いかにも最初の誕生日の頃は彼等はまだせいぜい「ウマウマ」とか「バァ〳〵」位しか云へないが、小學校に入る頃になると三千位の言葉を聞き分ける事が出來る。此の三千といふ尨大な數は恐らく誰も信用してくれないかも知れない。此疑念には一應理由がある。いかにも普通の辭書に於てもほんの一萬五、六千から五、六萬の言葉が載せられて居る丈である。大日本國語字典は二十四萬餘の語彙を集めてあると云ふが之は恐らく口語數の最大限度であらう。併し普通に之丈の數の言葉が使用されて居る譯ではなく古今の文獻中最も多くの語彙を驅使したと云はれるシェークスピヤの著作と云へども一萬五千語を用ひて居る丈であるし、まして普通の書物は多くて五、六千で或人は二千語以內で十分日常の用を辨じ得ると云つてゐる。然るに子供は六歲にして既に三千の言葉を理解して日常の社會生活に必要な丈位の言葉數を知つてゐるといふ事はまさに奇蹟とも云ふべき現象であらう。

此の三千と云ふ數は單なる推測によつて出されたものではなく實際の調査によつて得られた數なのである。

久保良英、**幼兒の言語の發達** 兒童研究所紀要五卷

久保氏は日毎に覺えて行く愛兒の言葉を忠實に記錄して行かれたが、二歳から六迄歳の語彙の增加は次の如く六歳の時には二千三百近くの語彙を示して居る。

二歳	三歳	四歳	五歳	六歳
語數三〇〇、	八八六、	一六七五、	二〇五〇、	二二八九、

此の研究には一々の言葉も全部示されてある。

久保氏の研究は一人の兒童に就ての發達的調査であるが、二十五人の小學校新入生に就て調査した澤柳氏等の研究では、之以上の數が示されてゐる。

澤柳政太郎、田中末廣、長田新共著、**兒童語彙の研究**、大正八年

まづ辭書の中から六千八百六十七の言葉を書き拔き、印刷しておき、子供を一人々々呼んで是等の語を逐次尋ねていつた。斯る多數の數であるから無論數十回に分けて尋ねたので、その尋ね方も種々の仕方をとり、要するに子供がその語を知つて居るかどうかをたしかめて行つた。例へば「筆入とは何か」と聞いて說明させたり、「右はどちらか」と云つて擧手させたり或ひは大將から中將以下少尉迄順々に列擧させたり、或ひは物を見せてその名を云はせるといふ風な方法を用ひた。

その結果新入生の知つて居る言葉數は平均四千餘となり、久保氏の結果と多少相違するが、之は研究方法の相違に基くのであらう。

最多數	最少數	平均
五、一六二一	三、五〇〇	四、〇八九

如何なる語彙を知つてをるかを知りたい人は本書の中に詳細な結果が示されてゐる故に參照されたい。

此中には名詞が最も多く其他次の如くになつてゐる。

名詞	六十五・六%	代名詞	〇・九%
動詞	十九・二	助動詞	〇・九
副詞	六・三	感動詞	〇・七
形容詞	四・〇	接續詞	〇・五
助詞	一・八		

又語彙の內容から分類して見ると、飲食に關するものが最も多く次に道德並に心理に關するもの、身體、戰爭、動物、植物等の順となつてゐる。

意味の深化

以上の二研究によつて語彙の量的な發達を詳かにする事が出來、量の上から云へば小學校新入生はもはや一人前の言葉の理解者と云つてもよいかもしれぬ。併し此の言葉の理解即ち內容の點を考察するとそこに又著るしい變化があり、大人と子供との相違は單に言葉數の多少と云ふより言語の內容の深淺にある事を氣付いて來るであらう。

次に此の言葉の理解の狀態を例を擧げて說明してみやう。例へば筆者等が幼稚園の子供にお母さんとは何ですかと尋ねてその觀念內容を調べて見た所が次の樣な色々の答をして居る。

人間。足が生えて頭がある。お母樣はお母樣。知らない。

是等はまだ「お母さん」と云ふ言葉を知つてゐてもそれを正しく表現する事が出來ない狀態である。

御飯炊くの。御馳走作つたりする。お洗濯する。おべゝ縫つたりするの。お臺所にゐるの。

是等は母の子供に對する役割によつて說明するもので斯るものを用途定義と云ふ。少し進んだ子供は更に母と子供との關係を以て說明してゐる。

子供を育てる爲にあるの。赤ちやんを生む。子供を生むの、生まないとお母さんゐないの。

斯るものは用途以上の定義と云つて一段發達した答である。

もう一つ例を擧げる。「時計とは何ですか」の問に對して、

丸いもの。ガラス。小さいの。動くの。針。鳴る。あそこにあるの。

等の如き不完全な答をなすものが滿四歲では四十%位。五歲では三十%位ゐる。

時間を見るもの。時間を知らせる。針が動く。學校に行く時何時つて見るの。大きい人が使ふもの。お母樣の腕にはめるもの。等は用途定義であつて大部分の子供は斯る答をする。眞丸くて眞中に針があつて周りに一、二、三、と書いてある。丸くて針があつてカチカチ云ふ所もある。丸くてネヂがあつて足があつてその後の眞中に振子があつて一、二、三、と書いてある。

等の答は用途以上の詳細な敍述で一層進んだ定義である。

同じ問を中學生或は吾々成人にかけられたとしたならば其答は一層複雜となり抽象的となつて來るであらう。斯くの如く言葉の意味内容の變化及び深化に知性の發達が見られる。故にビネーは此の關係を智能檢査に應用して、五歳の子供に、机、鉛筆、火鉢、電車、馬、人形を聞き、四つ以上用途定義がなされゝば合格とし、九歳兒には飛行機、虎、學校、兵士を聞き二つ以上用途以上の定義をする事を要求してゐる。更に十三歳に於ては抽象的な言葉憐れみ、復讐、慈善、羨む、勇氣を擧げて定義をさせて居るが斯る抽象語の理解は知性が相當に發達した爲にのみ可能なのである。

以上の如く子供の言語の發達は語彙の增加と意味内容の深化によつてなされるのである。併し之丈ではまだ一人前の言葉の使ひ手とはならない。子供の言葉には多くの間違つた用法、所謂訛りがある。之が訂正されなければ大人の言葉とはならない。

誤まれる用法

教育的環境の不完全な子供程間違つた言葉遣ひをなすが、或託兒所の子供の中から拾錄された次の研究は興味のある結果を示してゐる。

城戸幡太郎、**兒童語の表現形態について**、教育心理研究卷六　昭和六年

之によると子供は色々な誤用をなして居るが、先づ言葉の訛としては次の樣な種類が擧げられる。

省略型　こな下駄(こんなと云ふ可き處)

添加型　お化けなみたいの(お化けみたいな)

轉型　花咲いてあんの(あるの)

類化型　もかしちやつた(もやしちやつた)

傳承型　かつこと行くの(活動へ行くの)

又文章の形の中にも色々な誤がある。之を分類してみる。

一、孤立文、助詞、用語が缺けて居るもの

例　こねね、でつかいの、お父ちやん(このでつかいのはお父ちやんだ)斯る種類の誤二十二個があつた。

一、無緣文　助詞はあるが不完全なもの

例　母ちやんがこゝもいたいの(母ちやんもこゝがいたいの)此誤十一個

一、亂脈文　例　あたひ田舍へ行つてて、田舍のおばあさ

んゐるよ(田舍へ行くとおばあさんがゐる)十個

一、混線文　文脈の錯綜により意味表現の混線したもの、例、たまひじやくし(お玉杓子)の手や皆んな切つちやつて、たまひじやくしになつたの(手や尾がとれて蛙になつた)九個

其他、用語の誤を述べるならば、融通型と變容型をあげる事が出來る。融通型にも色々ある。

倒語型　意味を轉倒して現したもの。例、お辨當がはいれないの(出ないの)五個

轉意型　意味の轉用せるもの。例、先生、こはれたの(先生、紙が破れた)十一個

流用型　一定の活用を他の活用に流用したもの。例、お頭洗つてゐたの(洗つたの、或は洗つてきたの)十三個

變容型の中には次の樣なものがある。

省略型　貸してまつたの(貸してもらつたの)四個

混化型　用語の活用が二種以上結合して混化するもの。例、あたい齒が悪いのないの(悪くないの)六個

類化型　活用の類化せるもの。例、先生があそこにゐてた時(ゐた時)十一個

以上の他に副詞や助詞の誤り等があげられてゐるが、斯く數個の用法を混用したり、類化して勝手な子供の言葉が作られて居る。斯る誤用は素より訂正されねばならぬが、其爲には多くの經驗と教育を受けねばならない。

以上の他に國語の問題としては假名使の問題がある。之は大人でも屢〻誤つて惱まされるものであり、理論としても、歴史的假名使說と發音的假名使說が對立して居る。言語心理學の立場からは其何れを採るかの前に、先づ現今實際に多くの人々が用ひて居る假名使を調査する事が必要で、東京應用心理學會に於ては數年前から其爲の特別調査會が設けられ既に數種の業績が發表されて居る。

以上語彙の增加、意味の深化、正しい用法の三點から說明したが尙其他言葉の意味を追究して行くと、兒童の心性が明かとなり、前號に紹介したピアジェの「言語と思考」(J. Piaget The language and thought of the child 波多野氏兒童心理學)には其興味ある結果が報告されて居る。